

住む

吉田兼好は『徒然草』の中で「家の作りよは夏をむねにすべし」と書いた。
しかし実際は、冬の日本家屋には隙間風が吹きこみ、とても寒い。
そんな暮らしが感覚を研ぎ澄まし、季節の僅かな変化にも敏感になるという。

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物を見るだけで楽しいものです。旅先や、いつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するならば、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気を感じてみましょう。もし上手いかわからない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【住まいの見方を工夫する】

実は、住宅ほど読み解きが難しい建物はないかもしれません。それは、年代や様式で区分けすることが難しい上に、増改築されることも多く、また建てた人のキャラクターに大きく左右されるからです。

ただ、もっと簡単に住宅を楽しむ方法もあります。

それは、床や畳に腰を下ろすこと。洋間の場合は椅子に腰かけることで、立ったままでは感じられなかった空間の良さが浮かび上がってきます。そしてもうひとつが、建具を開閉してみる。特に茶室や座敷など凝った意匠の部屋では、ディテールの造作がまるで違って見えるはず。す。

もちろん、いずれの場合も所有者に許可を取るのがエチケットです。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょ。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができ、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

登録 / 2004年3月

登録基準 / 造形の規範となっているもの(主屋・書院・茶室・渡り廊下)

国土の歴史的景観に寄与しているもの(表門・辰巳蔵・北座敷)再現することが容易でないもの(雜れ)



photo: Hisao Takeuchi / Koji Oguri

主屋の外観。通柱を見せず、繊細な格子と障子の平面的な構成が、軽やかで美しい表情を生み出している

小栗家住宅

半田運河沿いに佇む、煎茶文化の華やぐ大邸宅



土間に架かる荒々しい仕上げの牛梁

愛知屈指の名邸

愛知の多様な登録文化財の中には、重要文化財に勝るとも劣らない文化的価値の高い建物もあります。その筆頭にあげられるのが小栗家住宅です。

現在はミツカンミュージアムで賑わう半田運河の源平橋あたりは、かつて蔵が立ち並ぶ町並みで、小栗家はそこで萬三商店という屋号で醸造業や肥料、米穀を扱う商売を営んでいました。小栗家住宅は店舗兼住宅で、間口30m、奥行き110mの広大な敷地に、主屋を

はじめ書院や茶室など14もの建物が建ち並び、美しい庭が築かれています。

十代目小栗三郎兵衛と煎茶文化

小栗家のルーツは室町時代の小栗判官に辿るといわれ、江戸末期ごろに鱒や大豆粕を用いた肥料の製造と販売で半田屈指の豪商となりました。十代目小栗三郎兵衛は、苗字帯刀と二代限御目見えを許され、明治になると愛知県区長や県会議員を務め、半田の発展に貢献しました。

しかし、身体の調子を崩して40代で隠居すると、以降は数寄の世界に耽溺していきます。



瀟洒な意匠が美しい煎茶室

その頃に建てられたのが現在の小栗家住宅の大本となる建物群で、施された意匠には、当時流行していた煎茶文化のしつらえが取り入れられました。

華やかな意匠

繊細な格子が美しい主屋の旧事務所に入り、奥へ続く土間を進むと、クドに巨大な樗の牛梁が架かり、見るものを圧倒します。煎茶ではこのような奇木が重用され、玄関の式台には同じ樗の磨き上げられた一枚板も用いられています。

式台を上がると、18畳の大広間の先に華やかな意匠の煎茶室があります。庭の見える大きな障子窓や、複雑に編まれた網代天井、紫檀の透かし窓に陶製の換気窓などの美しいしつらえは、煎茶で重用された中国風のデザインです。また透かし窓の先には黒檀でできた仏壇があり、彫刻には中国の故事がほどこされています。

広大な邸内には、他にも明治23年の大演習の折に有栖川宮熾仁親王が宿泊した書院などがあり、いずれの建物にも格調の高い座敷飾りがつくられ、三郎兵衛の高い文化的教養を窺うことができます。

モッコウバラと銘酒「愛してる」

小栗家住宅にはもうひとつ見どころがあります。それは表門の先に植わる、半田市指定天然記念物「萬三の白モッコウバラ」です。毎年4月中下旬に、甘い香りとともに真白い花が一面に咲く光景は半田の風物詩の一つとなっています。

十四代目当主の小栗宏次さんは、モッコウバラの花酵母から日本酒の製造に成功し、ハート型の蕨から「愛してる」と名付けました。貴重な文化財を受け継ぎつつ遊び心のある事業にチャレンジする小栗家住宅には、今も数寄の心が息づいています。



モッコウバラの映える小栗家住宅

1870年(明治3年)・1887年(明治20年)増築
主屋 / 木造2階建て 寄棟造瓦葺き
〔棟梁〕小栗善七
半田市小栗町1-18



photo:Hiroshi Yoshida

敷石を転用した土間と和モダンの客間が隣り合う美しい空間。中心を縦に走る大梁にも注目

柴田家住宅

美しく住みこなされる、美濃路の町家



外観をみる。出格子は改修時のもの

枇杷島地区の町家

名古屋の宮宿から岐阜の垂井宿を結ぶ美濃路には、いまでも情緒ある町並みが点在しています。柴田家住宅は、庄内川の自然堤防を通る美濃路に面した町家で、近世の雲囲気と現代の暮らしが共存する住宅です。

出格子が目を引き、外観の大戸をくぐると、線路の敷石を転用した土間が広がります。自然に摩耗した敷石は踏みごたえもよく、また

文化財に申請し、「あいたて博」などの活動にも積極的に参加されています。

城下町名古屋の情緒

江戸時代以降、尾張地方にはお茶の文化が根付き、柴田家にもツシや主屋の内庭に茶室が設けられています。かつてこのあたりの町家では、抹茶が日常的に振る舞われていました。また現在でも、西枇杷島まつりでは山車にあわせて野風炉が随行し、旦那衆に野点を振る舞う風流な文化が残されています。

夕暮れ時の枇

杷島橋から眺める庄内川は格別です。そのすぐ傍の美濃路では、出格子から光の漏れる柴田家住宅が、情緒あふれる姿でひっそりと佇んでいます。



夜景。格子越しに漏れる光が美しい



2階の和室。中心の間柱は後に足された

艶のある表面に朝日が差し込む瞬間はひととき
わ美しい姿を見せてくれます。

この土間ではかつて、飴や菓子の製造と販売を行っていたといい、広い空間を得るために中心の柱が抜かれています。その荷重をささえるために十字梁が架けられていて、これは尾張地方の町家に見られる特徴から「尾張型町家」とも言われています。

土間の横には落ち着いた和モダンの客間が設えられ、広々とした空間がとてもし心地よいです。

リフォームされた町家

戦後になり、下小田井の市場が移転すると、西枇杷島付近は衰退し、かつての町並みもしだいに姿を消していきました。また柴田家住宅も、飴屋を廃業し、その後は保険会社などに賃貸されていました。

ご当主の柴田正康さんは、退職を機に傷んでいた建物を修復し、町家の特徴を活かしつつ、現代の暮らしに合わせた環境を整えました。設計に際しては建築家と何度も意見交換を重ねたといいます。また、その過程で登録

下小田井の市と柴田家住宅

柴田家が美濃路に店を構えたのは江戸末期ごろで、近郊には江戸時代になって開かれた下小田井の常設市があり、枇杷島あたりの美濃路も発展しました。

現在の柴田家住宅は濃尾地震後に再建された建物で、外観を漆喰で塗り籠め、側壁を土壁にするなど防火対策を施す一方、内部は構造的な強度より瀟洒なしつらえに重きをおいた造りとなっています。土間の十字梁もその一環で、2階の客間では中心の柱を抜き、壁面の間柱も削られて塗り籠められ、より広々とした印象の空間になっています。

1896年(明治29年)／2008年(平成20年)改修
木造2階建て、切妻造様瓦葺き
【設計】不明 【改修】林廣伸建築事務所
清須市西枇杷島町辰新田65

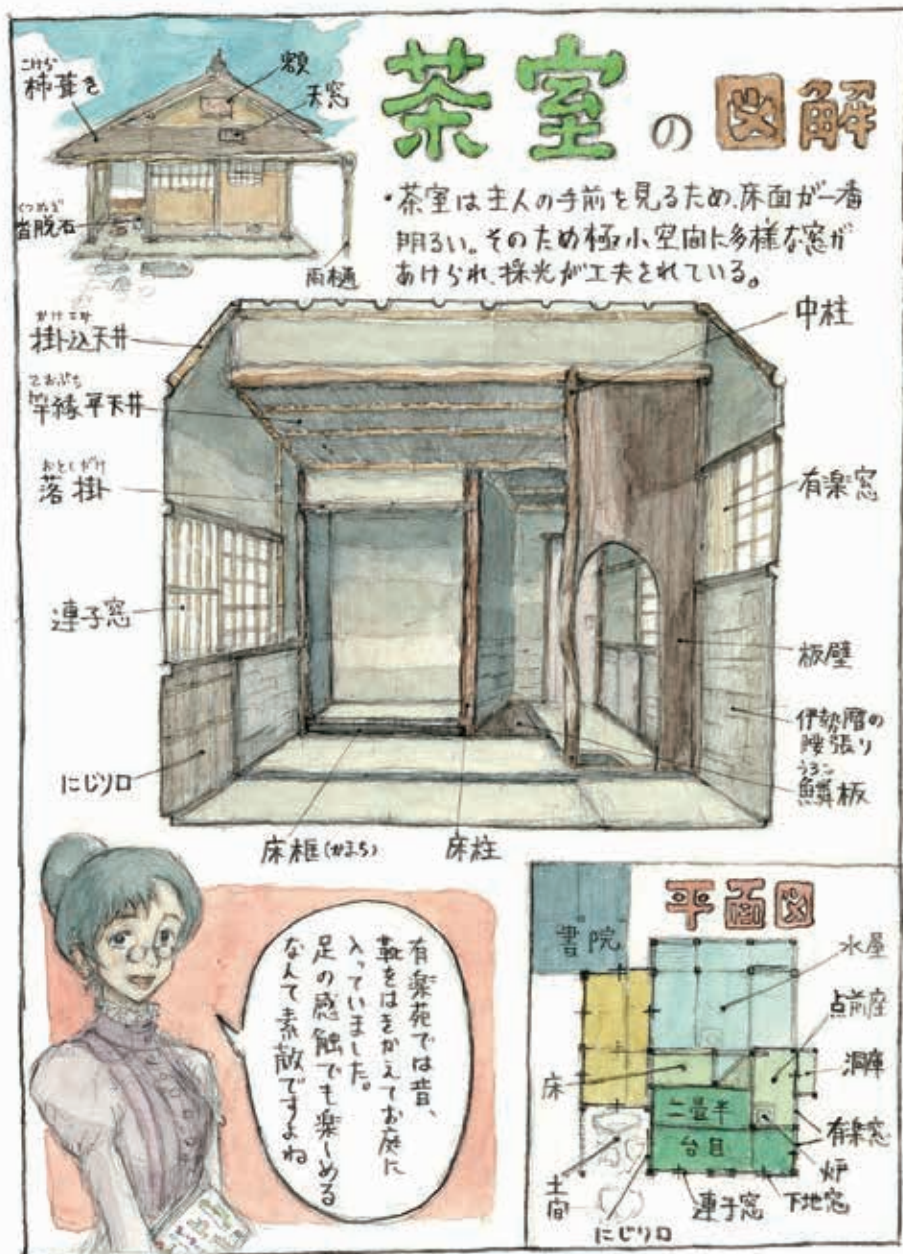


photo: Akihiko Mizuno

如庵の外観。庵のような姿に、軽やかで気品のある立ち姿がひときわ目を引く。これほどの名作に近くて会えるのが嬉しい

素人でも楽しめる！ 茶室の見かた

特集 1

茶室を楽しむ！

茶室は日本建築の中でもとりわけ特殊な建物です。閉じた狭い室内に洗練された造作を施し、侘びの美学に貫かれた静寂の空間は、世界にも類のない建築美を生み出しました。

一方で、茶室は茶事のための建物なので、茶の湯に通じていないと近寄りづらい側面もあります。

ここでは、気楽に茶室の良さを楽しめるような見方をご紹介します。

国宝如庵の姿

まずは愛知が誇る名作中の名作から。犬山有楽苑にある国宝如庵は、織田信長の実弟織田有楽斎の作で、元は京都の建仁寺にありましたが、幾度かの移築を経て、犬山に移されました。移築と庭園を手掛けたのは、茶室研究の第一人者で名建築家の堀口捨己です。

柿葺き屋根の小さな茶室にはたくさん窓が開けられ、とても軽やかです。また田舎屋風の造形は茶室建築の特徴で、苔庭に黄土色の建物がそと置かれたような姿が美しいです。



柴田家住宅の茶室。庭の点景ともなっている

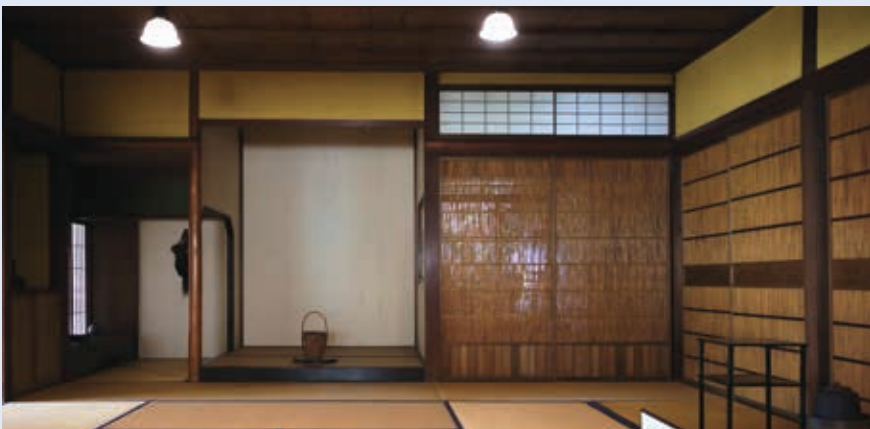
にあった東松家住宅にも2階に茶室があり、名古屋の町家ではこのような茶室が多くつくられていましたが、戦災を受け現在ではほとんど残されていません。

最後に、小栗家住宅の興味深い茶事をご紹介しましょう。情報科学を専門とするご当主の趣向で、床の間にプロジェクトションマッピングを応用した茶席が催されました。

茶室は、軽やかに移築され、一方で伝統を受け継ぎ、またプロジェクトションマッピングなど新しい趣向にも対応できる、幅広い魅力を持った建物なのです。



東松家住宅2階の茶室。吹き抜けの青い光が良い



小栗家住宅の14畳の主座敷。立派な床構えのあるこの部屋でも茶事が催される

中に入ると、ほぼ四畳半のとても狭い空間に畳が3枚半敷かれ、正面には床の間があります。炉の切られた点前座を除けば、わずかに2畳半の空間に、赤味がかった床柱の鋭い造形や、伊勢暦の張られた腰壁、艶やかな板壁と中柱など、溢れんばかりの創意工夫が施され、それでいて各々が見事に調和しています。これらは畳に座ることにより鮮明に目



如庵の室内。普段は非公開だが窓から内部を覗きこめる

に写り、時間を忘れて見入ってしまいます。如庵は、灰のひと粒にまでこだわる茶の湯の深奥を垣間見ることができると名建築です。

登録文化財の茶室たち

名古屋市のみならず、そんな如庵に倣った知足庵という茶室があり、ふたつを比較することで昭和の茶人がどのように本家を



為三郎記念館の知足庵。如庵に倣っている

写したのか、その工夫を楽しむのも一興です。また江戸時代からお茶の文化が深く根づく尾張地方では、柴田家住宅のようにツシと内庭に茶室があり、現在でも日常的にお茶に親しんでいます。明治村にあるかつて堀川沿い



photo: Akihiko Mizuno

東海道に面した外観。改修された格子の奥にガラス戸を設けている。囲炉裏の煙がツシの出格子から上る

白井家住宅

囲炉裏の火がゆらめく、魅惑の町家暮らし



土間の横のミセとオクミセを見る

東海道御油宿近くの造り酒屋

名鉄国府駅の目の前を走る、車通りの激しい国道1号線の近くに、囲炉裏を囲んで昔ながらの暮らしを営む白井家住宅があります。

駅の名前が示すように、このあたりは古代律令制で置かれた三河国の国府や総鎮守社の大社神社があり、近世には御油宿が設けられた歴史の古いまちです。白井家は東海道沿い

で江戸末期に造り酒屋を興した商家で、かつて敷地には酒蔵や酒造蔵が立ち並んでいました。

白井家住宅修復プロジェクト

白井家では平成まで造り酒屋が続けられましたが、廃業すると町家以外の建物を手放し、所有者のひとりでものつくり大学名誉教授

の白井裕泰さんは、傷むに任せていた建物をゼミの学生や大工棟梁の高橋定信さんの助力を得て、2005年から修復し始めます。プロジェクトはトステムやLeeXールなどの企業の研究助成を受けました。

傾いた建物を屋根こしし、傷んだ柱を根接ぎし、土台を取り替え、床を張り直し、格子



ナカノマの棚。煙で乱反射した光が美しい

戸を新たに設けるなど、大掛かりな修復プロジェクトは数年に渡って行われ、工事は今も継続されています。

ワンルームの町家

改修途中の白井家住宅ですが、現在は弟の伸治さんご夫妻が住み、建物を管理しています。

格子戸の玄関から土間へ入ると、修復されたミセやオクミセ、ナカノマとイマが繋がった開放的な空間となっています。また格子内側の土縁にはガラス戸が設けられ、道路に面した部屋と外部を緩衝する役割を果たしています。

この大きなワンルームのような空間は、大社神社の夏祭りのときには山車を見る休憩所として開放され、また地元のアハウスの憩いの場としても利用されています。

土間の先は小屋組みがむき出しの吹き抜け空間となり、奥のダイドコロまで繋がっています。土間の上部には波板ガラスの窓があり、ここから注ぐ朝日は小屋組みや土間に積まれた古物をきらきらと輝かせます。また拡散された光は建物の奥まで染み渡り、日常の風景を静物画のように美しく浮かび上がらせています。

豊かな暮らし

白井家住宅でとりわけ印象深いのは、イマの囲炉裏です。改修時に作られたものが、毎日火がくべられ、すっかり風合いを帯びています。パチパチと音をたてて揺らぐ囲炉裏の炎は、根源的な安心感を与えてくれるように、時間を忘れて見入ってしまう。

ご夫妻は空調設備のない環境で、朝起きると散歩に出掛け、昼は時を割り、日が沈むと本を読んで床に就くような暮らしを送っています。一方では、近所のコンビニも良く利用し、町中の古民家で上手にスローライフを満喫しています。



囲炉裏の炎。思わず引き込まれる

江戸末期
木造2階建て切妻造瓦葺き
[設計]不明 [改修] 白井裕泰、高橋定信
豊川市国府町流霞157



photo: Akihiko Mizuno/Sayaka Ito

中濱家住宅外観。妻側を見せる土蔵と平入屋根の主屋から板塀が続き、美しい町並みを形成している

中濱家住宅

有松の町並みを形成する、表情豊かな町家



ミセに陳列された有松絞りの品々

間の宿有松の顔

名古屋市内でもっとも情緒ある町並みを残す有松。東海道沿いではありますが、間の宿だったため宿はなく、藍染に絞りで模様をつける有松絞りで発展し、今も立派な町家がいくつも店を構えています。

名鉄有松駅から南下して東海道路に出て、東西に伸びる風情のある町並みを東へ。緩やか

に蛇行する街道を進むとすぐに、青みがかった灰色の土蔵と、格子に紫色の暖簾が掛かる中濱家住宅が見えてきます。平入の屋根が続く町並みに、切妻屋根を正面に向けた土蔵のフォルムが楽しいリズムを与えています。

中濱家住宅探訪

土蔵や主屋の虫籠窓に塗り込められた黒漆喰は、1784年の大火以降、防火のために外観に施された名残で、有松の町並みの特徴となっています。

格子の入り口から暖簾をくぐると、L字の土間に、ミセ、ナカノマ、ザシキが並ぶ近世町家の構成がそのまま残り、店内にはあでやかな有松絞りの品々が飾られています。

一方、上客は裏手の立派な住宅門から招かれ、枯山水の庭を通って茶室へ入り、お茶を楽しんでから商談したといえます。



ザシキの奥にある茶室。上客を招いた

また以前は、主屋に隣接する長屋門の奥に作業場があり、藍染の大きな瓶が土中にたくさん埋まっていました。現在は駐車場に使用され、すみっこに並ぶ瓶が当時のようすを偲ばせています。

守られた風景

有松の町並みは、平成28年に伝統的建造物群保存地区になり、近世的な町並みの姿を留めるため、電柱を地中に埋め、一方通行化して車通りを規制するなどの努力が続けられています。その背景には、名古屋市が戦災復興計画の道路整備で、多くの古い町並みや建物を失ってきた経験に基づいています。

中濱家住宅は、元は山田与吉郎商店という絞り問屋が営む店でした。中濱家は別の場所の有松絞りの製造と販売を行っていました。この町家の取り壊しを聞き、引き取ることとを決定したといえます。その際、地域の人々の口添えや金融機関の協力があっていい、有松にとってこの建物がどれほど重要だったのが窺えます。

まちなみとしぼり

ちりめん状の柔らかい布地と自然由来の色

味に独特の模様が浮かぶ有松絞りは、かつては浴衣などに好まれましたが、洋装にあわせてマフラーやネクタイなどワンポイントで用いるのもオシャレです。また最近ではユニクロとのコラボも話題となるなど、新しい可能性が探求されています。

そんな有松絞りが存続し再評価されていた背景には、美しい町並みが保存されていたことも欠かせません。伝統的な町並みと技術は車の両輪のように関わり合い、未だ見ぬ価値を秘めているのです。



有松絞りの生地。日焼け防止に裏側を展示

主屋 / 明治中期、土蔵 / 明治期
主屋 / 木造2階建て、切妻造瓦葺き、
土蔵 / 土蔵造2階建て、切妻造瓦葺き
[設計] 不明
名古屋市緑区有松2300
https://shibori-nakahama.com



photo: Akihiko Mizuno/Sayaka Ito

森の中に佇む主屋。板塀に囲われた前庭には庭門が開き、ツシの格子窓には「犬山焼」の看板が掛かっている

尾関家住宅

希少な犬山焼を継承する、隠れ里の窯元



ツシ内部の風景。古道具に光があたって美しい

森の中の町家

自動車の厄払いで知られる犬山成田山の麓に、江戸時代に確立された犬山焼の窯元の尾関家住宅があります。細い道から森へ続く奥まった所にあるため、看板が出ていてもうっかり見落としてしまいがちになります。

森への小道を進むと開けた場所に、山を背に平入の町家がたち、「犬山焼」の看板が掲げられています。また、森がなだれ込んだような前庭には板塀がめぐり、庭門が設けられています。

板塀の向こうには竹林が迫り、木々に覆われた町家の姿は、まるで昔話の隠れ里のような趣です。

尾関家と犬山焼

尾関家はもともと、犬山城下町の近くで瓦を制作していた御用瓦師で、国宝犬山城や寂光院などの名刹にも瓦を納めていました。それが1842年の大火の影響で現在地へ移り住んだと伝わっています。

瓦師だった尾関家が犬山焼を手掛けるようになったのは明治になってからで、それまで犬山焼を援助していた藩侯成瀬家の後ろ盾がなくなり、職にあぶれた陶工を受け入れたことがきっかけになったといえます。

現在では犬山焼を制作できる陶工はほと



ツギノマで展示されている犬山焼の陶磁器

んどおらず、幻の焼物ともいわれています。ただ、赤絵を施した華やかな絵柄は今も愛され、ご当主の七代目尾関作十郎さんは、地元の企業とのコラボ企画にも積極的に取り組んでいます。

陶工の住まい

現在、尾関家住宅の主屋は、若手作家の陶芸作品の展示や、絵付け教室のワークショップなどに使用されています。玄関を入ると広くて奥の深い土間があり、かつてここは大勢の陶工たちが食事を摂るスペースに使用されていました。

居室側へ目を移すと、6畳と8畳のツギノマの奥にザシキがあり、襖が開け放たれた空間には、たくさんの陶芸作品が並んでいます。ザシキとツギノマの前には板塀で囲われた前庭があり、木々に和らげられた光が色とりどりの陶器たちを美しく見せてくれます。

土間に隣接するツギノマの奥にはツシへ上る階段があり、屋根裏へ重い荷物を持ち上げる滑車が残されています。ツシでは養蚕が行われ、資材の保管がされていました。尾関家のツシには、他にも古道具や絵図の拓本、博覧会で授与したメダル、古地図やパンフレットな

どたくさん古いものが残され、家や犬山の歴史を伝える魅力的な場所となっています。

暮れなずむ町並み

近年、主屋の裏手にある土蔵が改装され、内庭もきれいに整備されました。蔵内はギャラリーとして活用され、犬山焼の見事な大皿が飾られています。

森に囲まれ、辺りより早く日の落ちる尾関家からは、おだやかに暮れていく町並みが遠く見えます。その傍らでは、新しいアイデアと向き合う陶工が、日々創作に汗を流しています。



整備された土蔵と内庭

1842年
主屋 / 木造2階建て 切妻造瓦葺き
【設計】不明
大山市大字犬山字白山平2
https://www.inuyamaya-ozeki.com



photo: Sayaka Ito/Hisao Takeuchi

庭から主屋を見る。低い床に浮かぶ障子が美しい。緑青色の銅板の下には茅葺屋根がある

寛家住宅

建築家が住みこなす、名駅そばの古民家



露地の眺め。季節の花々が出迎える

名駅付近の懐かしい風景

超高層ビルの立ち並ぶ名古屋駅のすぐ近く、発展する笹島エリアを横目に、近鉄の大きくカーブする線路を進むと、都心とは思えない懐かしい町並みが残っています。迷路のような細い道を辿ると、よく手入れされた庭に露地を開く、緑青色の銅板屋根が目印の寛家住宅があります。

主屋は明治初期に近くの農家を曳家した建物で、銅板の下は茅葺き屋根が残されています。敷地内は庭を中心に別宅や茶室、お稽古場などがコの字型に配置され、ゆったりとした外部空間が形づくられています。

庭と老松

鉄平石の敷かれた露地を進むと、立派な松

継承と普及に貢献しています。また平日は、高齢者のコミュニティスペースとしても利用されています。そんな活動が評価され、名古屋まちなみデザインレクシオンからはデザイン賞が贈られました。

夜の帳が下りた庭を足元の明かりを頼りに歩く露地は、ひとときわ美しく感じられます。上空には煌々と明かりが輝く超高層ビル群が伸び上がる、他にはない風景です。



以前は囲炉裏があった客間

が出迎えてくれます。寛家は能と縁が深く、この松は名古屋能楽堂の鏡板に描かれている老松のモデルになった銘木で、根元にひろがる苔や石灯籠とともに、美しい景色をつくっています。

松の先には主屋の玄関があり、左手にザシキと客間が並びます。床の低い農家の佇まいに真っ白い障子が浮かぶ姿はとても印象的です。

中に入ると、客間の天井を渡る湾曲した梁

が目を引きまします。このような歪んだ部材は強い荷重にも耐えられ、かつては小屋組みなどに好んで用いられていました。また、以前は客間に囲炉裏があり、自在鉤が釣られていたといえます。梁の奥に見える風合のある簀子天井は、その名残をとどめています。

建築家の住む家

一方、主屋の土間側はご当主で建築家の寛清澄さんの事務所に改築されています。軒先をくぐると、杉板に囲われた空間にはイームズチェアなどの名作椅子が置かれ、その奥には建築模型や蔵書が並び事務所スペースがあります。

寛さんは、自邸の登録文化財の申請をみずから行い、建物の修復に行政からの助成を得るなど、保存と活用の道を模索してきました。また、古民家での暮らしを通じて木造建築への造詣が深く、有松など町並み保存地区の建物の改装も多く手掛けています。

まちなコミュニティスペース

寛家住宅のもうひとつの特徴は、地域に開かれていることです。お稽古場では隔週の土曜日に子ども能楽教室が開かれ、伝統文化の



鼓の置かれたお稽古場の風景

江戸末期 明治初期移築
木造平屋建て・入母屋造茅葺き(銅板仮葺き)
[設計]不明
名古屋市中村区下米野町3-29